

30年越しの宿題―釧路→苫小牧400kmを走る

30年前、まだ大学生だった頃、親友と二人で利尻・礼文・稚内から知床・納沙布・襟裳岬を越えて苫小牧に到る北海道東半分の旅(右上地図:道東サイクリング)を計画した。エスプリ1号(右上写真)に乗って、1000kmを走ったが、体調不良や日程の制限により、釧路で自転車を降した。その後、



日本縦断やオロロンライントライアスロンなどで北海道の大地は何回か走ったが、苫小牧から釧路までの400kmは走れないままだった。開業してからはトライアスロンやサイクリングからも離れ、ますます夢は遠くなりあきらめつつあった。しかし2009年9月にシルバーウ



ィークという奇跡の4連休があり、一念発起して30年越しの宿題「釧路→苫小牧400km」を走ることとした。急に予定したために飛行機の切符が取れず、土曜半日仕事した後で羽田空港→新千歳空港→最終の特急で釧路駅に何とか着き、翌朝早くからサイクリングを開始するという「黄金計画」を立てた。あずさも遅れることなく、予定通り羽田空港に着いた私を待っていたのは「機材の遅れにより予定の飛行機が40分遅れる」というものだった。ちょうど特急に間に合わなくなる時間だ。JALの職員に聞いてみても「どうにもなりません」とのとても冷たい対応(どうにもならないのはわかるけど、とても事務的にあしらわれたのはカチンときた)。それでも飛んでる間に挽回して30分遅れくらいにならないかなと期待した。新千歳空港空港到着時には何とか間に合いそうだったが、空港の中で機体の



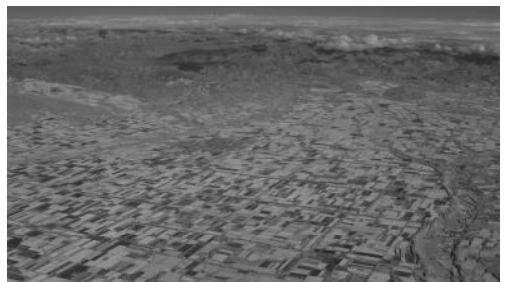
移動に時間を使い、タッチの差(5分)で釧路行きに間に合わなかった。すぐに釧路行きの特急券をキャンセルして、明日早朝に釧路に着くことができる唯一の方法、夜行バス[札幌→釧路]にかけた。携帯サイトで1席空いているとのことで、予約しようとしたが、携帯からアクセスができず、また時間外でバスターミナルにも電話が繋がらないため札幌駅からテレビ塔近くのバスターミナルに直行した。しかし、着いたときには「本日満席」という非情な結末であった。既に10時01分(右写真)、さらに計画を変更して、札幌で一泊して、明朝、丘珠空港→釧路空港へ行くこととした。サイクリング開始が5時間ほど遅れるが、これ以外の方法はないことが判明した。早速、飛行機の予約を取り、札幌駅前のホテルを探したが、5連休の初日の札幌駅前でそんな



に簡単にホテルが取れるわけがない。東横ホテルの親切な従業員さんがくれた駅前ホテルガイドを使って電話をかけまくり、ようやくリッチモンドホテルに入れたのは11時を回っていた。シャワーを浴びてすぐ寝、

翌朝は4時45分には起きて札幌駅前に向かった。

早朝の札幌駅前には殆ど人はいない。信じられないくらいの秋晴れで、本当ならもう釧路から自転車に乗っているかと思うとくやしさが百倍である。札幌駅前から丘珠空港へバスで行き、丘珠空港ではパンと牛乳をめいっぱい腹に詰め込んだ。釧路に着いたらすぐに走り出すためやれることは総てやっておく。一刻も早く自転車に乗りたいという焦りはあったが、飛行機に乗ると気分は一転した。札幌丘珠→釧路空港便はなんと1月前に登った日高山脈の頭上を越えてゆくのだ。左側座席のため主峰幌尻岳は見えなかったが、夕張岳を初めとした絶景が楽しめた。



本当はすごく損をしたのだが、何かすごく得をした気分になってしまったのは我々が

ら何とも楽天的オヤジである。釧路空港8:30am着・バスで30年ぶりの釧路駅(左写真) 9:20am着、宿泊予定の駅前ホテルで一室を借りてサイクリングウェアへの着替えと自転車の組立てを大至急おこなった。あまりに焦ったものでサイクリングパンツを裏返しに履いてしまい、浦幌・道の駅で気がつくまでみっともない格好で走ってしまった、何とか10時には釧路駅前をスタートをできたものの、既に予定より5時間遅れ、不要品を宅急便で家に送り返す作戦も中止となってしまった。

本当は、30年前に最後に宿泊した「まぎばユースホテル」の跡地に寄ってここを出発点にしようとしたがそんな時間はない。網走駅を出てからすぐに帯広方面へ向かう国道38号線に出た。さっき網走丹頂空港から駅に向かって走る道を逆行することになる。街路樹のナナカマドがもう赤く結実している。途中まで走ったところでタイヤ圧やサドル高の調整が必要になり、路上でやってもいいかなと思ったが、「←西港」という道標を見て突然海が見たくなり、海岸方向に左折した。海側からの風が強く、ちょっと苦労したが10:40,ようやく西港に着いた。海岸も風が強く、ダイナミックな雲が湧き上がってちょっと迫力ある風景(右写真→)であった。事実三脚を立てて海の写真を撮っている人もいた。私もまねして数枚撮った。再び国道に戻り、王子製紙工場を過ぎ、11:00,大楽毛駅に着いた。駅前広場には釧路種の馬

の銅像が立っているが、大楽毛は三本木、盛岡とともに「日本三大馬市」として全国に知られたところである。白糠町「恋問」に入ると海沿いの道进行するコースとなり、フラットなのはよいが横風が強い上に路側帯が狭くてしかも車が右側をブンブン走ちよっとスリリングな走りとなった。10分ほど走ったところで、再びすごい波が押し寄せてくる海岸が見えてきた。たまたま再び海岸線へ、すごい波が次々と波が寄せてく





る。しばらくすると地元のサーファーがボードを持ってやってきたが、しばらくじっとビックウェーブを眺めていたが、やがてあきらめ顔で帰って



行った。サーファーも残念そうだったが、自主的に海岸散歩を楽しみ始めていたサーファーの犬（右写真・犬強調→）がもっと残念そうだった。遅れ遅れの旅にて私も再び走り出した。庶路駅を過ぎたところで、この先少し登りとなるため、121:



12,コンビニ(この先もずっと



世話になるセイコマート←左写真)に立ち寄って、遅い昼飯を食べた。思いの外、この後の登りは長く、なまった体にまず第1の試練となったが、周囲の景色がきれいで救われた。峠を下ってゆくと馬主来沼というきれいな場所があったが、せっかくハイスピードで下ってきたのにもったいなくなり、そのまま

通過した。ちょっと惜しい風景であった。この後は音別に入り、JR直別駅を過ぎたと



ころで釧路支庁から十勝支庁へと入った。

JR直別(ちよくべつ)駅を過ぎると、直別川(左カラー写真)を渡り、JR線とも海とも別れ、いよいよ峠道へと入ってゆく。直別隧道までの標高差+16

0m程度の快適な登りなのだが日頃のトレーニング不足でペースは上がらない。道沿いのマークも「鹿飛び出し注意！」となり、実際にエゾシカの群れを遠くに見たり、「ケーン」という警戒の声を聴きながら、



走ることになる。直別隧道(トンネル)周辺は紅葉にはまだ早いですが緑が美しく心癒さ

れるところである。空の雲も秋らしく羊雲風になってきた(左下白黒写真)。14時27



分、予定を著しく遅れつつも直別
隧道無事通過。
一気に百mを下
って、もう一つト

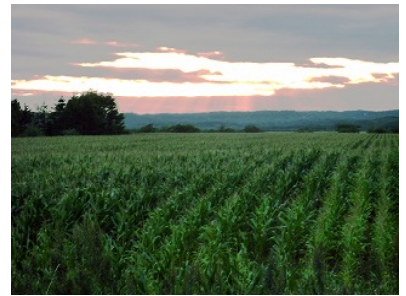
ンネルを越えると、一旦傾斜は緩やかになって、JR線との併走となったが、ほっとするのもつかの間、再び浦幌トンネルへの登りとなった。浦幌トンネルから先は快適な浦幌町への下りとなり、15時前、できたばかりの浦幌町の道の駅「うらほろ」に到着した。浦幌町の先でJR線とも国道38号線とも分かれ、この先、本日の目的地である「広尾町」まではあまり、街中を通る期待が持てないと判断したため、ここでしっかり、食料と水分を補給することとした。まずは何はともあれ、大好物のソフトクリームを食べた。(右写真)その後、オープンしたてで観光客でごった返す道の駅の売店に入り、調理パンと牛乳とキャラメル3個(コーン味・コーヒーマ味・小豆味)を購入。パンと牛乳はすぐに胃袋に流し込まれたが、ここで購入したキャラメルが後で大ピンチを救うことになる。出発して初めてトイレに行ったのだが、ここで初めて朝焦って着がえをしたため、サイクリングパンツを逆さにしてはいていたことに気がついた。会陰部の圧迫を軽減するためのパッドが外にむき出しになって、とても恥ずかしい格好になっており、トイレで着替えた。



宿の予約は取っていなかったため、ここで宿泊ガイドを取り出して、電話をかけまくったが、昨日同様連休のためなかなか宿が取れず、10本目の電話でようやく「広尾町」の宿が取れた。今回は野宿の準備がなかったため、電話中は冷や冷やものであった。1時間ほどのオアシスのような「道の駅」での安らぐひとときではあったが、本日の宿泊地が決まった以上長居は無用。いよいよ「広尾町」へ向けて、夕暮れの十勝の旅が始まった。道の駅から5kmほど走ると、16時26分、「吉野共栄」というべらぼうに広い交差点(右写真)にぶち当たり、帯広方面は右、えりも方面は左に分かれた。ここで根室本線とも分かれることになる(JR駅という目標物兼休憩所を失うことになる)。ここからはしばらくはとて



も快適な田園地帯の走りとなった。広大な十勝平野にトウモロコシや大豆などの農場が広がり、まっすぐに走る道に車の往来もわずかである。ずっとこんな道がえりも町まで続いていたら幸せであるが、そんなに世の中は甘くはなかった。短い幸せは大河「十勝川」までは続いた。16時54分、十勝川河口橋到着。十勝川ではもっとも河口側にある橋である。空を飛ぶ鳥以外、この橋の周りには私以外誰もいない。名峰十勝岳を源とする雄大な十勝川とそれがはぐくむ美しい十勝平野の風景を本当に独り占めにしたひとときであった。流れ来る方向には、優しく残光が輝き、流れゆく方向には遠く太平洋が見える。この河原で天幕が張れたら最高なのにと至極残念な思いをした。いつまでもここにはいられない。十勝川で日没を迎えると、いよいよ本日最後の戦いに臨んだ。ここから先は走る毎に周囲は暗くなってゆく。そうこうするうちに今回の新兵器「自転車用ナビゲーター(右下)」が本日の走行距離100.1kmを表示した。まだまだ本日のゴールは遠いが、とりあえず無事100kmを越えたことにずいぶん励まされた。そうしていよいよ本格的なナイト・ツアーの時間となった。今回ヘッドライトや安全用点滅ライトは完璧に準備してきたため、夜間走行でもまったく不安はない。心配なのは体力と気力のみ。50m程度の軽いアップダウンが続く。集落はほとんどなく、原野みたいなところを走っているようである。再びエゾシカの気配を感じる。こやつらは車が通っても知らんぷりをしているのに、自転車野郎が通るとやたら「ケーン」と大騒ぎして逃げてゆく。いつもならうっとうしいと感じる乗用車もほとんど姿を見かけなくなり、家の灯りも、道路灯も全くない「暗黒と静寂の世界」へ踏み込んだ。全く孤独な世界である。見えるのは頭上の雲間にちらほら見える星と、自分の愛車のヘッドライトだけである。長節・湧洞と豊頃町内を通過している





のだが、町の中心が帯広の方にあるため、336号線沿いには何にもない。18時12分「大樹町」に入る。大樹町は広尾町と接しているはずなので、何となくゴールに近い気がしたが、そこは北海道の町、とても広いのだ。「生花」という美しい名前の集落を過ぎ、19時04分、宿泊を断られた「晩成温泉」分岐を通過した。一旦「ナウマン象発掘地」のある幕別

町に入り、再び大樹町に入った。このあたりで、光り輝く未確認飛行物体の様なものを目撃したが、後で調べると、この近くに「大樹飛行実験場」というものがあり、何か実験をしていたのかもしれない。「UFOだ！ UFOだ！」と騒ぐ気もないほど、一刻も早く宿に着きたい気持ちが強かった。2回目の大樹町入り以降は少し開けてきて、19時52分、とうとう大樹市街分岐点に到着した。ここで再び、宿に連絡を取り、何とか到着できそうである旨を伝えた。（温泉入浴可能時限に間に合いそうだ！！）日が暮れてからは雲が垂れ込め



てわずかし星が見えなかった夜空が再び少し雲間を開けて、星の輝きを現し、心に赤いファイトの灯をともらせた。このころになると、猛烈に腹が減ってきたのだが、何せ周りに全く商店はない。自販機も1時間に1回巡り会うかである。ここで役に立ったのが道の駅で買った3つの味のキャラメルであった。ほっぺたが落ちるほどおいしい3種のキャラメルを代わる代わるなめたり、食べたりして血糖を上げ、本日最後の戦いに挑んだ。20時06分、広尾町入り。幻の夢と消えた「サンタランド」のサンタさんが出迎えてくれた。わたしの夢は幻にしてはだめだと励ましてくれているようだ。20時25分、とうとう帯広からの道、236号線に合流した。30年前、大雪山一十勝岳縦走の後、当時文通していた帯広の高橋家の家族旅行に混ぜてもらって、この道を通り、初めて襟裳岬を訪れた。ここからはその道程に重なるように走る。とてもなつかしく少し悲しい。20時55分、自販機でアクエリアスを買おうとして、とうとう本日の宿「ホテルむらかみ」の看板→を発見。小躍りするほどうれしかった。ちょうど自販機で缶コーヒ



一を買っていた女性に聞くと、ここからはあまり登りもないとのこと。いよいよゴールは近い。しばらく走ってゆくと浦幌町以来5時間ぶりの街に入った。街灯が輝いている。街中を若者が歩いている。まだコンビニもパチンコ屋もやっているようだ。宿の夕食は既に終わっているため、セイコマートで野菜や蛋白不足を補おうと、サラダうどん、魚肉ソーセージ、ご褒美として大好きなバナナ(大)とバニラアイスを買って、

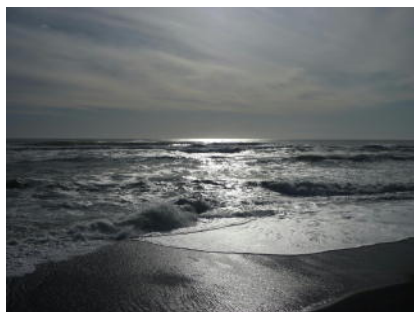
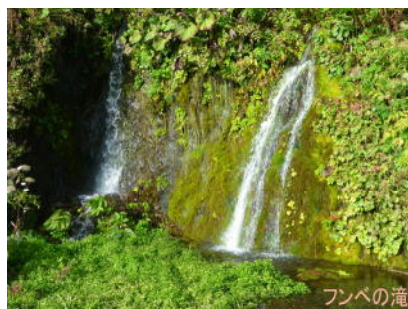


とうとう21時30分、本日のゴール「むらかみ」に到着した。早速大浴場で汗を流し、先



ほど買ったものを一気に平らげて、女房に到着報告をした。と同時に深い深い夢の中に突入してしまった。

2日目の朝は「むらかみ」の豪華な朝食とともに始まった。バイキング形式で品数が豊富でとても美味しかったため、ついつい食べ過ぎてしまった。食後のコーヒーを飲み干したら、さあ出発だ。明日は天気が崩れる予報なので、今日中にできるだけ遠くまで行かなければならない。むらかみ発 7時06分、この広尾の街を出るとえりも町までは大きい街はない。ひたすら海岸線を走るのみである。



7時21分 フンベの滝到着。太平洋にはすでにお天道様が上がって海が眩しい。美幌橋を過ぎると、右側の山の斜面の傾斜がきつくなり、崖と海にはさまれた狭い海岸線を走る。留別(るべしべつ)を過ぎると、とうとうトンネル(タニイソトンネル:左下)の中を走るようになってくる。トンネル内は広く、走りやすい。トンネルのないところで



も風の強いところではかなり高く作られている波よけをさらに越えて海水がかかってくる。自転車にかかると錆びる心配があるため、全速



力で走り抜ける。8時11分、とうとう「えりも町」へ入った(前頁写真)。十勝支庁と日高支庁の境目は襟裳岬より手前30kmのところにある。あとで地図で見るとたしかに日高山脈は襟裳岬が終点ではなく、この町境のあたりが終点になっている。



えりも町
に入るちょ

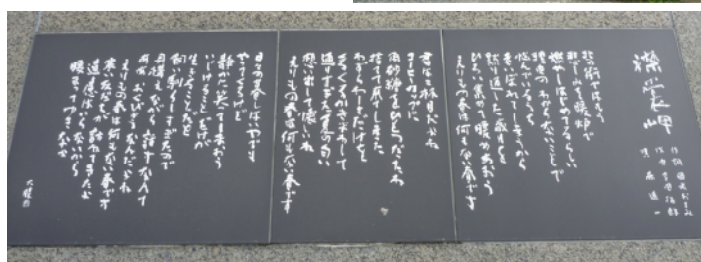
っと前で、「黄金道路」はそろそろ終わりのようで、ここからは右最上段の様な風景はだんだん見られなくなってきた。9時05分庶野の街に到着。ここではサーファーが沢山いた(右上)。昨日は

白老で断念したサーファーを目撃したが、今日は皆とっても楽しそうに波に乗っていた。ここでえりも町市街に直行する336号線と別れ、いよいよ、襟裳岬道路に入る。左右は熊笹の原野となり、左前方には今回最大のランドマーク「襟裳岬」が見える。岬先端の岩々までがかなりはっきり見えるようになった(右白黒)。また右奥にはゆったりとした山々(豊似岳?)が見える(右カラー)。この浜を百人浜というらしい。後で知ったのだが、百人浜の名の由来は、この浜の沖は難所で昔、南部藩の船が沈没し、この浜に百人の死体が打ち上がったとのこと。幽霊がよく出るスポットらしい。真っ昼間の通過でよかった。9:32「悲恋沼」通過。この名の由来は久作(和人)とマエラ(アイヌ)の悲恋の物語。争いの中出会った2人は、悲恋を嘆き、来世での再会を誓って襟裳岬で別れた。マエラは幾日も浜辺で泣いて過ごしたが、いつの間にかマエラの姿は消え、その後に沼が生まれたという。



えりも岬直前の9時42分、走行中に200kmを越えた。岬がちょうど折り返し点になる。しかし、天気も折り返し点という感じで、強風がお

さまったのとひきかえに、ぐんぐん雲が広がってきた。気持ちのいい広々とした牧草地帯を過ぎ、10:02、襟裳岬駐車場に到着した。まずはともあれ、29年ぶり(日本縦断の翌年、文通していた高橋家の家族旅行に混ぜてもらって来訪)に襟裳岬へ到達した。岬へ行く前にまずは「襟裳岬」の歌碑チェック。昭和49年の森進一の襟裳岬はみんなご存じらしく、歌碑の前で口ずさんでいたが、となりの島倉千代子の「襟裳岬」はみんなわからんちで行っていた。これは発売昭和36年。やむを得まい。岬



の展望台からは岬とそれに続く小島がみられた。ここには、北海道で確認されている約550頭のゼニガタアザラシのうち、約300頭が生息しているとのことで、この時はよくわからなかったが、後で撮った写真を拡大してみたら、20数頭が小



さく写っていた。長玉(望遠レンズ)を持っ

てくればその場でゼニガタアザラシの姿か確認できたかもしれない。観光客が多く、この旅行初めての自分の記念撮影を撮っていた。



私はソフトクリームが好物で、観光地へ行く



あるが、ここでも当然しっかり食べた(コーヒー味だったかな?)。売店のお

ばちゃんにこの先登り下りは多いの?と聞くと、えりも町市街地に入るまでは結構↑↓はあるよとのこと。目標の400kmのうち、まだ204.5km走っただけであり、あまりのんびりもしてられない。10時47分、進路を北東にかえて、旅を再開した。言われたと

おり、草原地帯(右写真→)の軽いアップダウンを繰り返して走ってゆく。11時31分、歌別というところで336号線に再び合流した。11時40分えりも町中心部通過。その先(夕陽丘)でいつものセイコーマートに入ってこれも大好物のバナナポートとゆでトウモロコシを食べた。北海道のコンビニにはゆでたてのほっかほかのトウモロコシを売っているところがあり、トウモロコシ大好き人間の私にとってはまさにオアシスであった。ここでポカリスエットも買い込んで背中にしまったリュックサックのウオーターバックに注入した。走りながらものすごいカロリーを摂取しているが決してサイクリング中に太ることはない(痩せもしないけど...)。すごい量のエネルギーを消費しているからである。今までの記録としては、ツールドのと400kmと言うイベントでお昼の間に(朝飯・夕飯以外)に行動食としてバナナ8本、おにぎり3個他副食沢山を食べたこともある



セイコーマートでしっかりエネルギーを補給すると同時に、ここで本日泊まる場所を探した。残りの距離から考えて静内での宿を探したのだが、秋祭りか何かがあってどこも満杯。一歩先の新冠町の民宿が何とか取れた。しかし、今晚も夜間走になるのは間違いない。ただ今晚は、街灯も通る車も無いような原野を走る心配はなさそうである。12時48分様似町に入る。様似町入口の看板(右上)はいつか登りたい山アポイ岳といつか見たい花アポイの固有種・絶滅危惧種のヒダカソウかと思われた。素敵な看板である。12:58



日高耶馬溪という景色のいいところで10人くらいの人が集まって作業しているので足を止めてみるとウェット



スーツを着た4人の若者が海に入って日高昆布を収穫していた。まだまだ波が激しく、頭から波をかぶりなが



らの大変な作業のようだった。もうしばらく走ると、今度は海岸に日高昆布が並べて干されていた。さらにしばらく走ると家並みの上にアポイ岳(右→)が見えた。つい自転車を止めて眺めると海の方には海鳥の群れ、のどかな昼下がりである。



13時54分とうとう浦幌で分かれて以来1日ぶりに鉄道と再会した。日高線終点の様似駅である。いざというときは自転車をたたんで電車に乗れるそういった安堵感に包まれた



様似駅(写真右2)のとなりは観光協会となっており、いつかアポイ岳を登る日のためにアポイ岳関連のパンフレットを入手した(荷物になるのに...)。様似駅を出るとすぐに親子岩(右3)、塩釜ローソク岩と奇岩が続いた。14:18, 日高支庁3番目の町、浦幌町へ入る。浦幌町境の

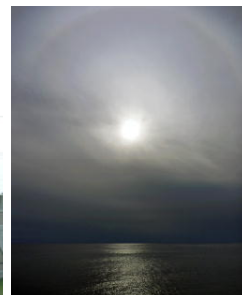


絵は乗馬姿である。いよいよ日高地区の核心部に入ってきたという感じである。浦幌二中のところで今回の



走行距離250kmに到達した。浦河はこの地域の中核となっているようで、大きな日赤病院(右4)、検察庁、裁判所、警察署などがある。しかし、駅は以外にも質素であった。通り過ぎる電車も1両編成のかわいいものであった。町役場前には乗馬姿のブロンズ像がそびえていた。昆布や競走馬で潤っているのか町役場の庁舎は南箕輪村役場とは比べものにならないくらい立派なものであった。町を抜け高台に出て「下北半島でも見えないかな」と海を望むと、立派な光輪がかかっていた。「明日は雨だな」と少しがっかりした。 15:56、潮風香る馬と桜の町「新ひだか町」に着いた。「あれもう宿泊予定の日高町？、早すぎる、おかしいな」と思いながら走っていると、鳶舞川(けりまいがわ?)というほとんど読めない川を渡り、久しぶりの道の駅!!!「みつ

いし」に着いた。ここで謎が明かされる。 腹がとても減っていた。道の駅



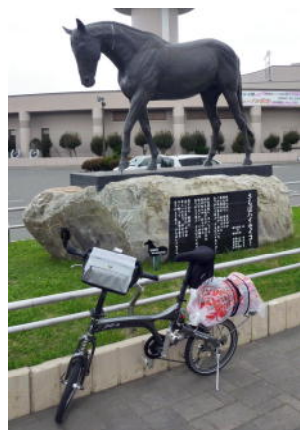
「みついいし」で普通なら絶対ソフトクリームを食べるところだが、ここには大好物の「いも餅」があった。ついでに「揚げ芋」も食べてしまった。



普段なら罪悪感にさいなまれるところだが、身体動かしているし、まあいいやということになった。ここの店員さんに尋ねると「新ひだか町は平成18年に静内町と三石町の合併でできた町で日高では最も人口が多いけど(後で調べたら25,000人もいる、いろいろ役所がある浦河町は14,000人)、役場とかみんな静内の方にあるので三石はとても不便になってしまった」と不満げだった。この町は競馬ファンにはトウショウボーイ、オグリキャップの故郷として有名である。ここからは海岸沿いの走りやすい道(浦河国道)が続く、その道沿いに鮮やかな草原と美しいサラブレッドの姿が見られるようになった。いよいよ真っ暗になってきたと思う頃、静内橋の手前で総走行距離300kmを越えた(17:49pm)。橋を渡ると日高では一番と思われる街が開けてきた。「静内」の街である。ちょうど静内はお祭り中で、シルバーウィークの中、沢山の人々で賑わっていた。18時、静内駅に到着。18:16とうとう本日の宿泊地、新冠町に入った。



本日宿泊予定の松田旅館は駅裏にあったが、ちょっと探すのに手間取った。ここの旅館は「あけぼの食堂」もやっているため、夕食は格別美味しく、食べきれないほど出た。さっ



きのダブル芋串を少し後悔した。食後風呂から出るとあっという間に睡魔に襲われてしまった。翌朝は7:40am,お世話になったご夫婦の写真を撮って出発した。雨の予報だったのでばっちり荷物をビニール袋でカバーした。

国道に戻って、新冠町へ。道の駅サラブレッドロード新冠の前には競馬ファンでなくても名前を知っている名馬「ハイセイコー」の銅像があり、この前で記念撮影。さらばハイセイコーの歌碑までであった。新冠町を過ぎると海岸線でありながら、アップダウンが増えてくる。疲れのたまってきた3日目の私にはあんまりありがたくな



い。厚賀の街に入ったところで一旦国道を離れ、厚賀駅(左2)に寄り道した。生理的欲求を果たすためと、日高線のホームに入ってみたかったためで、ここは無人駅なのでそれが果たせた。休憩していると、パトカーがやってきて不審者として職務質問を受けた。というのはウソでずいぶん励ましてく



れた。綺麗な風景が続くが、やや単調で飽きてきた頃、門別灯台(右上)が見えた。灯台からは今まで走ってきた日高の海岸線が眺められた。また足下にはハマナスの花や果実(右: プチトマトみたい)が



見られた。



日高門別灯台からは馬の放牧場のある小高い丘を越え、9時48分沙流川(さるがわ)に到着した。沙流川の支流糠平川をさかのぼると1月前に登頂した名峰幌尻岳にいたる。またこの川のほとりには二風谷ファミリーランドがあり、ここまで登ると、平取町特産の「びらとり和牛(幌尻登山の後で食べたのだがまさに絶品!!)」と温泉!!が待っているのだが、空模様が怪しく断念した。沙流川橋には左下2のような可愛い絵が彫られていた。沙流川を越えたところで国道



と別れ、富川駅(10:07到着)へ。コスモス(左)が美しく咲いていた。坂を登って富川高校へ、ここからケイアイスペースファームまでの一直線の4キロの道は、アップダウンはあるが見渡す限りが牛馬の牧場と農園(右)になっており、車も殆ど通らないためとても気持ちのいい快走コースとなった。しか





し、間近に美しい馬たちが迎えてくれ、しかもとてもフレンドリーで自転車を駐めるとどんどん寄ってきてくれるため、ついこのんびり旅にな



ってしまった。このコース上でとうとう今回の累積走行350kmを越え、あとゴール(苦小牧)ま



で50kmとなった。しかし追い立てられるようにとうとう雨がぱらぱらとしはじめた。

馬たちとの楽しい時間も雨によって打ち切りと相成った。牧場・農園コースもケイアイスペースファームという牧場で突き当たりとなり、右折して再び国道235号線へ戻った。国道に戻ったところが「日胆国境」(日高国と胆振国の境界線)となっていた。「平取牛」を食べられなかった時のプランBとして、「鵜川のシシャモ」を食べるという作



戦(夏に幌尻岳に登る前に国道沿いのドライブインで食べて美味しかった)もあったのだが、店は通り過ぎてしまった。やむを得ず、雨具装着の必要も有り、いつものセイコマートでおなかに優しいカステラ風パン(右)を食べた。噛まなくてあっという間に食べられ、栄養



も満点で胸やけもしないため、自転車旅行ではよく食べる。11:10am鵜川大橋を渡る。さっきセイコマートに寄ったばかりなのに再び「道の駅むかわ四季の館」と言う標示を見つけ、ついつい立ち寄ってしまう。ここで大好きな「アンモナイト」の化石の巨大なものに出会った。右下の赤いのが私のサングラス。即ち頭の横断面積である。いかに巨大であるかがわかる。ここではゆでとうもろこし(¥100)をいただいた。安い





のにすごく美味しかった。11:39am厚真町に入る。この町はこの旅行前には全く知らなかったが、稲作とサーファーで有名なところらしい。そうこうする間に12:09am, とうとう最終目的地「苫小牧市」に足を踏み入れた。



ここで雨も一旦やみ、蒸し暑くなってきたので雨具を

脱いだ。パラパラ雨程度なら走っている内にある程度身体も乾くため、雨具はない方が気持ちいい。学生時代は暑さを嫌って良く小さめのポンチョ(価格も激安)を使ったが、風があると風圧を受



けやすく、今回は使っていない。 苫小牧市に入って40分ほど走ったところで、ようやくコンビニストアにたどり着き、最後の栄養補給と苫小牧観光の情報収集を行った。ブラックタイガーのエビカツサンドとカレーまんはとても美味であったが、肝心の観光のための情報収集に関しては「苫小牧には大した観光地はないので札幌へ行った方がいいよ」と素っ気ないものだった。このまま駅に直行すると、目標の400km走行に少し足りなくなる恐れがあったため、雨模様ではあったが、苫小牧港へ寄り道した。すると何とそこには2年前の正月に小笠原諸島へ行った時にお世話になった大型フェリー「きそ丸」が入港していた。これからどの港を目指すのか興味があったが、ターミナルの建物内に入ってもきそ丸の行き先を示す標示はなかった。



た。苫小牧港を出ると道がどんどん広く、車の数もどんどん多くなり、20分ほどで苫小牧駅前のSL広場に着いた。ここでSLをバックにここまで頑張ってくれた「エスプリ・デュ・ラルジャン1号」の記念撮影を行った。そして14時6分、苫小牧駅に到着と相成った。計画通り、自転車のナビはきっちり400.0kmを示しており、我ながらちょっとびっくりした。



1日で100km以上自転車に乗ったのはなんと16年前の「佐渡トライアスロン」以来。400km以上のツーリングにいたっては「ツールドのと400」以来で20年近いブラン

クとなった。体力は当時と比較にならないくらい衰えてはいるが、気力のみで何とか無事完走となった。最初のJALの遅延から始まり、札幌では野宿寸前。初日の宿到着は21時30分になってしまうなど、トラブル続きのスタートではあったが、雄大な風景や土地の人や生き物に触れ、若さが沸々とわきたつような3日間であった。

日本一周のためにはまだ①苫小牧→長万部、②大間崎→東京、③伊豆半島一周、④鳴門→高松、⑤大分→萩(平成23年9月完)の5コースが残っている。まだまだ

喜んではいられない。

苫小牧駅で自転車をたたみ、ホームではあこがれの「トワイライトエクスプレス」号が大阪駅に向かってゆくのををちょうど見送り、札幌へ向かった。札幌で

は行列のできる回転寿司(出てきた時には120人が並んでいた!!!)で腹をいっぱいにし、翌朝は札幌時計

台、羊ヶ丘展望台

を観光した。何度も北海道へ行っているのによりやく初めて訪れた「羊ヶ丘」は本当に広々としてとても気持ちのいい空間であった。

**Boys, be
ambitious like
this old man**



西日本制覇に向かって: 大分→萩323kmを走る

9/22(土)の午前中の診療を終えて、すぐに折りたたみ式の自転車・工具・ウェア等一



式を乗せ、大至急「木曽福島駅」に向かった。いくら遅くなくても本日中に「大分駅」に着いておく必要があったが、列車を乗り継ぎ、何とか大分駅(左写真)にたどり着いた。大友宗麟像に挨拶をし、急ぎ駅前のビジネスホテルに入る。今回は著しい準備不足のため、これから自転車の調整、オイル

さし等をおこなわなければならない。かれこれしている間に時間は経ち、結局4時間ほどしか眠られないまま、9/23(日)の朝を迎えた。未明の5時11分、ホテル前で自転車だけの記念撮影(左)をした後、いよいよ2年ぶりのロングライドに旅立った。しばらくは真っ暗闇の中を自転車の調整具合をみながらゆっくり走る、相変わらず変速機の調整が悪いがこのまま行くこととする。しばらく行くと右側に海が見え、東の空にうっすらと色が出てくる。5時46分、7kmほど走ってようやく第1の目印、大分マリーナパレス水族館「うみたまご」(右下写真)を右にみる。水族館大好き人間なので是非寄っていきたいところだが、まだ開館前である。



もちろん開館を待つ余裕はない。目の前に高崎山も迫ってきた。



5時54分別府市へ入る。

ここで右後方の空が明けてくる。本日の晴天を保証するような美しい東天紅だ。しばし海辺の歩道に出て別府湾の風景を楽しんだ。1人2人の船人を除き海も



も、向こうに見える別府の温泉街もまだ



眠っているようだ。急ぐ旅でなければゆっくり別府市の観光地巡りを楽しんで温泉三昧と行きたいところだが、今日はただ通過するだけである。6時23分別府タワー(次頁右)前通過。ここでは一切観光はしないつもりでいたが、大分湾をぐるっと北に回った日出(ひじ)町を通過する際、「日本一の大ソテツ・松屋寺」という看板が目





に入り、巨樹が大好きな私はついつい吸い寄せられるように左折してしまった。「松屋寺」は拝観受付前で、お宝の拝観はできなかったものの、庭園は開放されており、広く素晴らしい庭園と日本一の大ソテツ(左2写真・赤外写真のため、葉っぱが白く写っています)をみることができた。後で調べた



ら大ソテツは左右一対の物だったらしい。立ち寄ってみる価値は十分あった。日出の町中をしばらく行き、宇佐へ直行する国道10号と別れ、大分空港道路と分

かれた。ショートカットする方が楽であるが、今回もできる限り海岸線に忠実に進む方針である。

8時JR九州大神(おおが)駅近くのセブンイレブンで初めての休憩+朝食を摂った。今回も夕食以外はすべてコンビニでパン、牛乳、ジュースなどを摂っ



てゆく予定である。



大神(おおが)駅を過ぎる

とJR線とはしばしの別れとなる。しばらく細かいアップダウンが続き、急に前方の風景が開けると、八坂川である。八坂川の河口(右2)はとても広く、杵築



(きつき)橋がかかっているがこの橋はとても長く350mくらいもある。橋からの眺め(左3:海



方向)は絶景である。また橋を渡った高台には杵築城(左4)がありなかなか絵になる。海沿いに守江湾をぐるっとまわるとふたたび緩やかに登り、田園地帯に入る。刈られる前の稲穂がとても美しい(右3)。丘陵地帯をゆっくり進むと、前方に再び光る海が見えてくる。青空にはぽっかりと雲が浮かび、なんともものどかな景色である。(次頁左1) 9:15am 安岐町(次頁右1)の町境標に対面。しかし後で調べてみると安岐町は既に2006年合併して国東市となっている。この過



去の町の道標に描かれている仁王様は、718年仁聞菩薩が開いたとされる両子寺（山岳修行の根本道場）のものようであり、きっと仁王様の描かれたありがたい道



標を撤去するのに気がとがめて残したのだらうと思われた。



9時29分大分空港(右2)到着、空港のレストランで美味しい物を食べている姿を一瞬妄想したが、時計をみて、泣く泣く先を急いだ。その後は海の近くではあるが田園地帯のようなところを走り、9時47分には旧武蔵町から旧



国東町に入った。ここにも古い町境板が残っていた。ここに描かれているのは「国東塔(おそらく重要文化財の岩戸寺国東塔)」である。国東塔は、国東半島を中心に分布する宝塔で、基礎と塔身の間に反花または蓮華座、ものによっては双方からなる台座を有するのが外観上の最大の特徴とされている。この町境板もあり



がたい「国東塔」のため撤去できなかったんだと考えた。田園地帯をどんどん行くと9時59分、道の駅「くにさき」に到着した。となりに「国東市サイクリングターミナル」もあった。ここでは同じbD-1を持つサイクリストと情報交換を行ったが、昼食にはまだ早く、立ち寄らずに通過した。



しばらく行くと、「右折すると富来開運橋がある」との



表示があり、誘われて右折した。行ってみると宝船(右4)が橋に組み込まれたようにぎやかな橋があり、早速記念撮影を行った。このすぐ近くには招き猫の神社(左3)もあり、このあたりは縁起物の多い「富くじ開運ロード」と言われているらしい。この

橋は起点のようだ。宝くじ好きにはたまらないところらしい。

富来開運橋からは、国東半島の主要な山々も眺められ、山名がわかるように看板も掲げられていた(右上写真)。この後は国道には戻らず、海岸沿いにサイクリングターミナルから続くサイクリングロードを走った。ロードからは海岸にも出ることができ、姫島もみることができた(右2)。大分県というのは著しく合併が進んでおり、市が14、町が3、村はこの海上の姫島村ただ一つである。古事記によると

伊邪那岐命、伊邪那美命の二柱の神が「国生み」にさいし、大島を生み、次に女島を生むとあり。この女島が姫島ということで大変ありがたい島らしいが、島へわたることはあきらめた。国道に戻り、午前11時6分、旧国見町に入る。ここからは山を越えて行くコースとなり、農村地帯と峠道が繰り返される。農村地帯は右下の写真のようになかなかの風景であった。古櫛トンネルには写真のようにこの地域の神楽かなんかの絵(左下)が彫られていて、良い雰囲気を出していた。

11時56分、道の駅「くにみ」に到着。大好物のエビフライ定食があるレストランが誘っていたが、道の駅の入口に鮎の大きな石像があり、やっぱり



タコが食べたくなり、タコ飯を探した。

レストランではなく、売店で発見。弁当物としては少し高い450円でしたが、もちろんゲット。副食としてソフトクリームと「つぶらなかぼす」というかぼすジュースを購入した。タコ飯も高価なだけあって大変うまく、ジュースも爽やかに疲れを取ってくれる飲み応えだった。タコの石像の前で記念撮影をして出発。この後も登り下りあり。途中の竹田津川沿いには左写真のような田園の美しい風景(左)が広がっており、しばし漕ぐ足を休めて写真を撮った。この後は国道213号線最長の新竹田津トンネルを通過し、12:52、豊後



高田市入る。ここで調子の悪い後輪のディレーラーを調整した際、スタンドに負荷をかけたらポッキリ折れてしまった。坂を下りた香々地町



(かかぢちょう)というところにちょうどホームセンターがあり、何とかちょうど我が自転車に適合するスタンドを売っていた。あまりにピッタリきた



のでびっくりでした。スタンド交換終了後少し坂を登ったところで、今回の100kmに到達した。今回は体力・準備不足と写真の撮りすぎでなかなかペ



新しいスタンドでしっかり立っている!!!



ースが上がらない。しかし予想消費カロリーは3774kcalとちょっと嬉しい数字が出ている。途中2枚の豊後高田市の表示板を見たが、合併で市境が変化したための物と思われた。今は国東半島の西半分の広い範囲が豊後

高田市である。

4時54分、豊後高田市の中心を流れる桂川を渡る。川を渡ったところで日向街道(豊前街道)は2つに分かれ、日豊線沿いに行く県道23号線と宇佐神宮を通る国道10号線である。「宇佐神宮」は

全国四万四千社と言われる八幡宮(南箕輪の殿村八幡宮ももちろん含まれる)の総本宮であり、宇佐八幡宮神託事件(和気清麻呂vs道鏡)で有名な神宮であるため、是非立ち寄りたかったと

いうよりは是非立ち寄るべきであったのだが、疲労のためか間違えて県道23号線に入ってしまった。



向こうには筑紫山地のなだらかな山々が望める素晴らしい風景が続くため、つい時間がないのも忘れてじっくりパノラマ写真(下写真)を撮ってしまった。



桂川渡河(15時前)



まい、残り時間も少なくなってきたために、宇佐神宮参りは後日ゆっくり施行することとした。稲刈りを前にした水田が拡がり、ゆったりと川が流れ、その



16時06分伊呂波川渡る。何ともない川であるが、河川敷で「恋空」という映画のロケが行われたらしい。16時14分とうとう中津市に入る。



中津市の市境標は極めてぼろく、ぼろぼろだった。ここには黒田如水が築城した「中津城」がある。高松城、今治城とともに三大水城といわれている。宇佐神宮をスルーしたから

にはどうしてもここは立ち寄らねばならない。大分県を走っていてやた



ら目立つのが「唐揚げ屋」であるが、特に中津市に入ると「唐揚げ屋」が目立つこと



に気がついた。後で調べたら、中津市は日本唐揚協会公認の唐揚げの聖地であるとのことだった。残念ながら、聖地の唐揚げは食べられなかったというより、胸やけを恐れて食べなかった。

それでも唐揚げ屋の看板に誘われつつ、食欲と戦いつつ、トロトロ行くと、16:50、ようやく大分県最後の駅「中津駅」に到着した。この駅前には、かの

「福澤諭吉翁」の銅像(左上)がある。余裕があれば壹萬圓札と一緒に記念撮影といきたいところだが、時間がなく、自転車との記念撮影にとどめた。引き続き、次のランドマーク、中津城に向かった。



た。中津城(右2)は、築城の名手、黒田如水(官兵衛)が築城した名城である。高松城、今治城と並ぶ三大水城である。蛇足だが、信州諏訪の高島城は三大湖城(松



江城・膳所城)である。中津城は翌日がお祭りらしく、木登りをする棒のようなものが準備されていた。ここで小倉方面から走ってきたサイクリストと情報交換。ここから先はさしてアッ

プダウンはないようである。彼はここで宿泊して、明日は大分市まで。わたしは門司まで行って、明日は萩市まで。ちょっと彼ののんびりした計画がうらやましかった。この日最後の記念撮影をし、いよいよ、宿泊地「門司」を目指して最後の走りに入った。

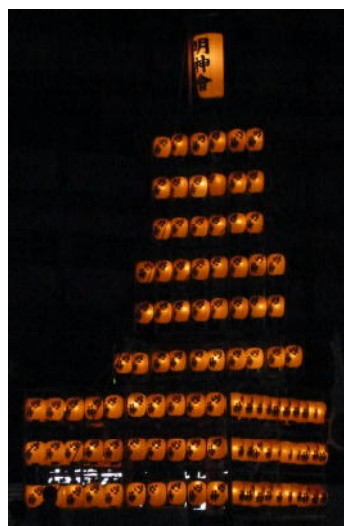


17:09中津城を出発、17:27,国道沿いのコンビニで最後の水分補給。ここで自転車のライトや標識灯を夜間モードにセットした。17:42,いよいよ陽が沈み、美しい夕焼けの景色(右

下)が拵がった。18:35,福岡県・苅田町に入った。この間、市町境の表示



があまりなく、どこを通っているかはっきりしなかったが、実際は吉富町(九州一小さい町、福岡県なのに郵便番号や電話番号市外局番が大分県中津市と同じである)、豊前市、築上町、行橋市と1時間ほどの間に4市町を通過していた。この4市町には人口12万人も住んでいるのだ。苅田町では秋祭りの最中で秋田の竿灯のような提灯がそびえ立っていた。ここで、リアのキャリアーを支えていたボルトが抜け落ちていたことを発見。アルミワイヤーで応急処置をしたが、さらにタイムロスとなってしまった。



19:16、最終目的地、北九州市に入る。20時近くになり、いままで正しいルートを示し示してしてくれたナビゲーターの電池が切れ、いよいよ迷子となり、ホテルに連絡。おおむねルート間違いは無いとのことで指示通り走行。一番大事な交差点「寺迫口」を19:54に右折した。



何とか無料サービスの夕食に間に合う時間、20:20には「亀の井ホテル」に着いた。無料サービスとは思えないほど立派な夕食がついた。

この夜はいつものように一風呂浴びて、目覚ましをセットするとすぐ寝てしまった。ひたすら爆睡。翌日は4時00分起床。すぐ近くのコンビニで朝食を買いだし、パンを牛乳で流し込み、食休みがてら自転車のメンテナンスをすると、4:50am 夜明けを待たずして萩への旅を始めた。5:30am関門トンネル入口に到着したものの、これは自動車専用道路で通行できず。近くの人に



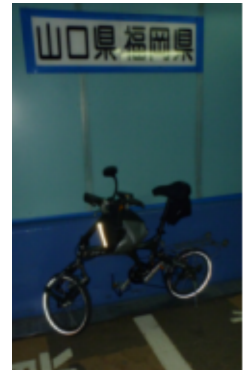
に自転車用の入口を尋ね、和布刈(めかり)神社(右4)[壇ノ浦の戦いの前日。平家が最後の酒宴を開いたといわれる]を目標にしてようやく6:37am関門橋のたもとに着いた。日本縦断の時にここから出てきたはずなのに、その時の記憶がまったく無い。ここで対岸の壇ノ浦の写真(右2段)を撮り、とうとう自転車歩行者用トンネルの入



口へ。ここでわたしの九州島一周(なんと4回に分けて走った)が完了した。エレベーターで地下に下り、右5段のようなまっすぐな通路を自転車を降りて歩

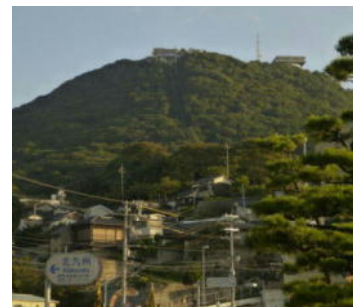


く。早朝なのでほとんど人がおらず、ちょっと異様な空間である。ここは海の底であるし、この上には平知盛や平教経、時子や安德帝のなきがらがあるのだ。そんなことを考えつつ、5:59am とうとう福岡県／山口県県境を越えた。同じ距離を歩いて、再びエレベーターで陸上へ。ここには壇ノ浦。壇ノ浦の戦いゆかりのモニュメント



[左上写真]があった。手前が八艘飛びの源義経、これを追いかけたのはたしか平教経のはずであるが、対側には碇を抱えた平知盛があった。「見るべき程の事をば見つ、今はただ自害をせん」と美しく散っていった知盛はやはりカッコいい。武者二人を脇に抱えて入水した荒武者の平教経よりは絵(像)になるようである。

時間があれば火の山ロープウェイに乗って早鞆(はやと)の瀬戸を上から眺めてみたかったが、まだ開業時間前であるし、火の山パークウェイを登るパワーも時間も無かった。火の山(右3写真)の脇の急登を登り、少し行くと下関インターにぶつかり、わかりにくい分岐の多い道を迷いながら何とか抜け出し、下関東郵便局の近くで山陽本線を渡った。このすぐ先で鉄路は山陽本線・山陰本線の2本に分かれる。しばらくは山陰本線に沿うように走り、7:06、綾羅木川岸のローソンで食料と水分の買い出しを行った。河口はすぐ近くにあり、釣り場として有名ならしい。8:12am 福江というところで本格的に海岸線へ出た(左写真)。



真)。ここの海はもう瀬戸内海ではない。響灘である。ここからまっすぐ泳いでゆけば、対馬さらには朝鮮半島へとつながっているのだ。



響灘に浮かぶ小島(前頁右4)は地図によると蓋井島(ふたおいじま)か？ 神功皇后が三韓征伐の時、この島の水の池と火の池の二つの井戸を蓋で覆ったことが島の名前の由来とされる歴史ロマンに満ちた島だが、もちろんここにも渡れない。少しか海岸線の走りを楽しむと再び峠道に入った。峠の頂上は山陰線の駅になっており、梅ヶ峠(うめがとう)駅とあった。この近くに梅の木が沢山



あったらしい。無人駅なので入らせてもらおうと、本日の目的地東萩駅までの料金は1450円とあった。鉄道だと国道より短く86.8km、

時間にして2時間22分である。ローカル線だから意外に時間はかかる(時速37km換算である。ちなみに飯田線辰野～北殿は時速32km換算ともっと遅い)。

梅ヶ峠(うめがとう)駅を越えるとしばしの下り。9時03分川棚温泉駅到着。駅前にはなぜか可愛い「龍の時計台」(右2)があった。この駅の右奥にある川棚温泉の歴史は古く、約800年前に



遡る。伝説ではこの辺りには青龍のすむ大沢沼があったが、大地震で温泉が噴出し、青龍を煮殺してしまったという。毛利氏の御殿湯があったり、漂泊の詩人、種田山頭火も長く滞在したらしい。小串駅を過ぎると久しぶりに



海岸線に出て、JRと併走となった。海にはのんびり小舟を操る漁師さんも見



えた。JRの列車と一緒に撮りたかったが1時間に1本の列車ではちょっと難しい(右3)。しばし海岸走り→鳥井ヶ峠→また海岸走りと続き。二見浦というところに「夫婦岩」(左2)という

綱で結ばれた2つの岩があった。二見浦の夫婦岩と言えば伊勢があまりに有名であ

るが、ここでは毎年正月2日、航海の安全と豊漁を祈り、地元の若者たちが厳寒の響灘で身を清め、大注連縄（おおしめなわ 長さ約30m、重さ約120kg）を張るということでこれもまたびっくりである。二見から山方面へ右折する山陰本線と別れ、海岸線を行く。土井ヶ浜というところに出ると



鼠島・神田岬方面の美しい景色が眺められた。ここには「土井が浜人類学ミュージアム」があった。急ぐ旅ではあるが、



「人類学」とかいう言葉には弱いのでつつい立ち寄ってしまった。土



井ヶ浜遺跡は弥生時代の埋葬跡で、国の指定史跡。ここから保存良好な弥生人骨が300体以上も装身具や土器を伴って出土したとい

う。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムでは、土井ヶ浜遺跡を紹介し、土井ヶ浜弥生

人の顔・かたちの特徴、旧石器時代から現代に至る日本人の形質の変化や日本人のルーツについての情報を展示していた。きわめて興味深い内容の博物館であった。時間があればもう少しじっくり見たいところであった。土井が浜人類学ミュージアムを出発すると、再び



海岸線を走ることになり、開けたところでは向こうに角島（つのしま）が眺められた（右1）。海の中を走って行く角島大橋は、自動車のCMなどでちょくちょく登場する観光スポット（右4:角島ホームページから借用）であった



らしいのだが、往復10kmを嫌がってパスしてしまった。後でこの写真を見て行けばよかったと悔しがった。角島分岐点その2には11:14到



着。ちょうどコンビニがあり、食料・飲み物を補

給した。9月とは思えないほど暑い日で、水分の消費

が速い。ここからゆっくりくだってゆくと沖田川という川に到達した(前頁左2)。再びここからはJR山陰線と併走することになる。ちょっと行くと正面に油谷島の見える美しい風景(前頁右下)に出会った



このあたりは道標によると「北長門海岸国定公園」に指定されているらしく、さすがに海やそこに浮かぶ島々の景色は美しい。11時50分本日3つめの都市、長門市に入る。ここからも左に美しい景色を愛でながらのんびり行くと野鳥の住む小さな池(左

2)に着いた。周囲が綺麗な木々に囲まれ様々な野鳥が見られた。望遠機能のない白黒カメラだったためその姿は瞼にしか焼き付けられなかったが、旅の疲れをしばし忘れた。油谷島分岐を過ぎると再び海と分かれ、少しずつ上ってゆく。椎の木峠をおっちら登って一気に下ってゆくといよいよ本日の最大の見所、「青海島(おうみしま)」が見えてくる。角島・油谷島と容赦なくパスしてきたのはこの青海島へ渡る時間と体力を確保したかったためである。まずは13時30分「長門市駅(右写真)」に到着。ここで青海島の情報を収集し、蒲鉾と金子みすゞで有名な仙崎港に向かった



朝焼小焼だ

大漁だ

大羽鰹(いわし)の

大漁だ。

浜は祭りの

ようだけど

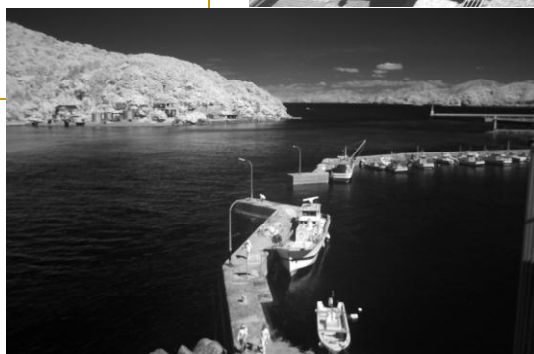
海のなかでは

何萬(まん)の

鰹のとむらい

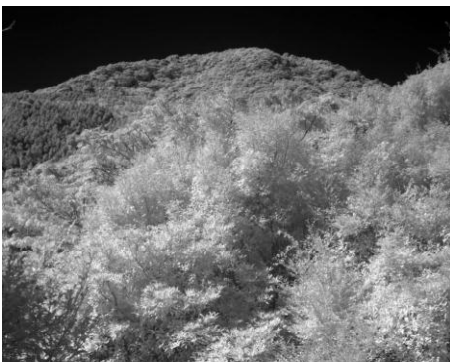
するだろう。

かつてこの金子みすゞの「大漁」という詩を読んだときにはすごいショックを受けた。仙崎には金子みすゞの記念館があり、観光客が沢山詰めかけていた。青海島観光は中年の自転車野郎にはちょっとつらかった。





まず最初から青海大橋が登りである。登りは辛い橋からの風景は最高で、面白いモニュメント(左)があったり、また港や対岸の景色(前頁右)など見られ楽しかった。防波堤には好天に誘われて釣り客も多く、けっこう大漁のようだった。青海大橋を登り切ったところは王子山公園となっていて金子みすゞの歌碑(右下)があった。一旦大泊まで一気に下り、すぐに大日比峠の急登になった。標高70m程度で左2写真のように景色はとても綺麗なのだが、傾斜度が思いのほかきつく苦しんだ。峠を越えると再び急降下して、夏みかんの原木がある大日比部落へ。「北長門海岸国定公園」の



主役であり、さすがに海やそこに浮かぶ島々の景色は美しい。『海上アルプス』と称され、激しい



・十六羅漢、変装行列、象の鼻などと名付けられた奇岩群が並ぶ。青海島自然研究路(上の地図)は距離にして2km、時間にして1時間足らずの散歩道であるが、上高地や奥入瀬、尾瀬などに匹敵するような素晴らしいルートで日本でも十指にはいる散歩道と言えるだろう。この風景を見るために遙

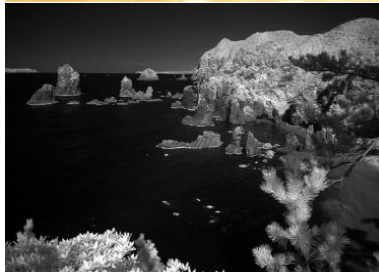
王子山 金子みすゞ

公園になるので植えられた、
桜はみんな枯れたけど、
伐られた雑木の切株にや、
みんな芽が出た、芽が伸びた。
木の間に光る銀の海、
私の町はそのなかに、
竜宮みたいに浮かんでる。
銀の瓦と石垣と、
夢のようにも、かすんでる。
王子山から町見れば、
わたしは町が好きになる。
干鰯のほひもここへは来ない、
わかい芽立ちの香がするばかり。

波が削り上げた洞門や断崖絶壁



々長門国を訪れてもよい。皇居の波の間にある大壁画、東山魁夷作の「朝明けの潮」(左1)はこの散策路からの風景と言われている(似た景色:右1)。この場所で朝焼けや夕焼けの海を眺めたらそれはもっと凄いことになりそうであるが、そこまでの時間の余裕はなかった。(暗くなるまでに萩城に到着して「中国・九州完全制覇」の記念撮影をする必要がある。)。名景を惜しみつつ、駐車場に戻ってくると、山口県公認のおやじの「松本正一」



らそれはもっと凄いことになりそうであるが、そこまでの時間の余裕はなかった。(暗くなるまでに萩城に到着して「中国・九州完全制覇」の記念撮影をする必要がある。)。名景を惜しみつつ、駐車場に戻ってくると、山口県公認のおやじの「松本正一」



「観光とっておきのひと」に指定されている名物

さんと猫の「チョコ松」と番犬Aが迎えてくれた。松本さんは独楽回しや色々な芸をしてくれたが、チョコ松は無芸のただの肥満猫であった。番犬Aには随分吠えられた。

「松本正一」さんが次々に繰り出すパフォーマンスは面白く、まったく飽きることのない楽しい時間が過ぎたが、日が暮れる前に萩市まで着かなければならないため、後ろ髪を引かれつつ、青海島紫津浦駐車場を後にした。仙崎へ帰る道も最初は海岸線の美しい道、そして大日比峠の急登と続いた。王子山公園は帰路もパスしてしまったが、後で調べたら遣唐使の吉備真備が中国からの帰途、王子山に「素盞鳴尊」を祭ったのが仙崎の祇園社の始まりとのことで、由緒正しき場所であったようだ。青海大橋を下ってから、観光客で賑やかな仙崎の東岸を通って、小浜の分岐に入っ

た。ここでは国道191号線(バイパス)を選ばず、県道287号線を行った。長門三隅駅を少し過ぎたところで、今回の目標距離である300kmを越えた。消費カロリーはここまでで何と11559キロカロリー、おにぎり64個相当である。三隅は長州の名家老、「」村田



清風」の故郷である。三隅から萩までは最後の登り。県道を通る標高64mの地蔵峠を選ぶか、国道191号の標高258mの鎖峠を選ぶか悩んだが、安全そうな国道ルートを選



んだ。鎖峠とは変な名前だが、昔は「鎖板坂」と呼ばれており、急な勾配のため鎖を伝って上り下りしていたということから付けられた名前ということだ。確かにちょっときつい登りではあった。道路の表示には標高231mとあったが、実測は260m、データベースも258mであった。ここからは一気に下りとなる。最後に怪我をするわけにはいかないので、慎重に下った。

このまま一気に萩市内まで下って行くかと思っていたら、一旦、三見市というところまで下って、そこから再び最後の登りになった。もう登りはないと信じていただけにちょっとつらかった。最後の登りを終え、玉



江川沿いに行くと、とうとう萩市内に入るための玉江橋(橋本川)に到着した。ここで渡るルートを間違え、少し迷ったが、何とか渡河。萩城を目指し、河口へ進むも外堀のような川(新堀川)にさえぎられて、ウロウロ。しかし運良く平安



橋(日本百名橋のひとつ。右3写真:Wikipediaから借用)という素敵な石橋を渡ることが出来た。その後は武家屋敷の中を走り、指月橋は渡らず、指月小橋からお城の前に入り、今回の旅のゴール萩城趾に到着した。四国の鳴門ー高松間が残っているため、西日本完全制覇とは言えないが、とりあえず中国地方完全制覇となった。2日での走行距離:321.7km、総上昇量(どれくらい登ったか):1583m(ちょうど大分市から由布岳を登ったくらい)、

総消費カロリー:12954kcalであった。右が今回のゴール写真。左が30数年前の記念撮影である。この時は東光寺・大照院・松下村塾を見学したが、武家屋敷の方は時間の関係で割愛したため、今回は武家屋敷見学をする事とした。しかしとりあえず腹がひどく減ったため、見学は翌日

まわしとし、予約を入れていた宿へ入ることとした。その晩は風呂で汗を流し、食事をしっかりとったら、片付けもそこそこに意識は消失してい

た。

3日目の朝は早く目覚めた。まずは海岸を萩城(右2)近くまで散歩。朝飯を早々に食べると30年前に果たせなかった武家屋敷の見学に出た。まずは長屋の長さが25mもある「周布家長屋門」(右3)、引き続き、かつて萩城の門があり出入りを見張ったといわれ

る「旧益田家物見矢倉(右4)」、日本の道百選に選ばれている「菊屋横町」(右5)を見学した。ここでは朝っぱらにもかかわらず、観光ボランティアのおじいさんが、丁寧に道案内と説明をしてくれた。元首相田中義一生誕地の庭園(左1)、さらに高杉晋作生誕地(左2)・

萩城趾



大分-萩サイクリング達成



木戸孝允生誕地(前頁左3)と回り、最大の観光スポット・松下村塾(前頁左4)を訪れた。以前妻と訪れたときは、松下村塾で今までで食べた中で一番美味しい「たい焼き」を食べたのだが、その店(屋台?)はもう無かった。代わりに売店で帰りのバスの中



中で食べるように名物夏みかんゼリー「柑の雫」(左2)を購入した。この間わずか2時間程度のお散歩であったが、武家屋敷～松下村塾の核心部の見学を十分楽しめた。

最後に「郡司鑄造所遺構広場(左1)」でかつての鑄造所の風景や下

関海峡での外国船砲撃、英・仏・蘭・米連合艦隊との戦争(下関戦争)にも使用され



た大砲のレプリカを見学した。とうとう旅の終わり、東萩駅に到着したが、ここからJRを使って新山口駅(旧小郡駅)までゆくと、2時間+4000円(含新幹線代)、連絡バスだと1

時間+2000円とすべて半分である。迷わず連絡バスを選んだ。新山口駅では山口県を訪れながら、河豚を食べられなかったため、迷わず昼食用に「ふく寿司」を買った。

